

国語**【解答】**

I

問1	問2	問3	問4	問5	問6
b	c	d	e	d	c
問7	問8	問9	問10	問11	問12
c	d	a	b	b	c

II

問1	問2	問3	問4	問5	問6
e	c	b	d	e	c
問7	問8	問9	問10	問11	
c	c	e	c	c	
問12	遊動の空間的広がりが数百キロに及び、異質な生態条件、政治区分、民族分布がみられることが多いから。				

【学習アドバイス】

本学の入試は100分間の解答時間で2科目を選択解答する。国語を選択した場合は約50分間で現代文の大問2題に解答することになる。2018年度の総設問数は24問、その内訳は5択の選択肢問題が23問、50字以内で解答する記述問題が1問。2017年度は総設問数が31問だったので設問数は減っている。2018年度の大問Ⅰの文章量が約2,000字、大問Ⅱが約2,500字。2017年度は大問Ⅰが約3,800字、大問Ⅱが約5,500字だったので、課題文の長さも短くなっていることがわかる。設問数と文章量の点からみて、2017年度に比べて受験生は余裕を持って解答を出すことができたのではないだろうか。

以下で3点に絞って具体的な学習アドバイスを示しておきたい。

第一に、「長文読解対策」である。2018年度出題された文章は、外尾悦郎『ガウディの伝言』（光文社新書）と松井健『遊牧という文化 - 移動の生活戦略』（吉川弘文館）からのものだ。例年同様、平易な表現で書かれた評論あるいは随筆（エッセイ）であり、高校生にも読みやすい文章だろう。とはいえ、2,000字以上の長文2題は「課題文を一度ざっと読む」だけでも2題合計で10分近くかかるのではないだろうか。だとすれば、「（記述問題を除いて）1問あたり1分半」で解答するペースをめざして準備しておくべきだ。具体的な対策は以下の2つだ。①文章全体を、二度も三度も読み返す時間的余裕はないので、「本文を読み進むのと並行して各設問に解答していく」方法を採用すること。②長文を要領よく読みこなすため、「各段落が『意見』部分なのか『具体例』部分なのか」をチェックしながら読む訓練をするとよい。練習素材としては、「教科書に載っている文章の出典」あるいは「本学の過去問として出題された文章の出典」を入手し、1章分ずつ「制限時間を10分」と決めて上記のチェックをしながら読む訓練を、週に2回以上は行うことをオススメする。この訓練は、大学生になってから膨大な資料の分析をする際に非常に役立つことを保証する。

第二に、「語彙力の増強」である。2018年度の出題内容は、漢字の知識を問う問題が2問、傍線部と同じ意味の語句や文章を選ばせる問題が13問、空欄に入る語句や文章を選ばせる問題が7問、指示語の内容を探させる問題が1問、傍線部の理由を50字以内で説明させる記述問題が1問となっている。上記の「傍線部と同じ意味の語句や文章を選ばせる問題」「空欄に入る語句や文章を選ばせる問題」の中で、日常で使われる接続語・副詞の知識で決まる問題が4問、評論や随筆（エッセイ）などで頻出の文章用語の知識で決まる問題が6問ある。要するに、全24問中50%を占める12問が語彙力（言葉の知識）で決まる問題であるということだ。対策は3つ。①学校の教科書に載っている文章の中で「意味がわからない語句」をチェックし、辞書で調べた意味とセットで「語彙ノート」に書き貯めていくこと。自分オリジナルの「語彙ノート」を作って、そこに「知識」が貯まっていくのを見れば自信もついてくる。②国語便覧や現代文用語集のようなサブテキストの中で「同義語」「対義語」「慣用句」「四字熟語」「評論用語」などのページに繰り返し目を通すこと。さらに、上記の「語彙ノート」に例文を書き写すようにすれば「文脈の推理力UP」にもつながり一石二鳥だ。③漢字の知識に関しては、2018年度は2問しか出題されなかったが、漢字の書き取りが10問ほど出題された年度もあったので、問題集を1冊はやっておくべきだろう。

第三に、「文脈把握力」と「論述力」をUPさせることである。2018年度全24問中12問は語彙力で決まるというより「空欄や傍線部前後の文脈の把握力」で決まる設問であり、毎年1問出題される50字以内での記述問題は「傍線部前後の文脈から読み取ったヒントを正確な日本語で文章化する力」で決まる設問といえる。対策としては、①空欄や傍線部前後の「言い換え」「対比」「因果関係」を意識的に探す練習をすること。②30字～60字程度の解答字数の記述問題を集中的に演習すること。①、②を両方満たすためには、本学の過去の入試問題を解くのはもちろん、記述問題中心の問題集を1冊こなすことをオススメする。